

祭礼の練物 岡山東照宮祭礼

福原敏男

A Ceremonial Parade: A Case of Okayama Toushougu

はじめに

- ① 岡山東照宮祭礼研究史
- ② 『東照宮祭礼賦物図巻』
- ③ 練物の解釈
おわりに

【論文要旨】

つくり物・仮装・山車・囃子などが氏子町中を練り歩く祭礼練物は近世以降の伝統的都市を解明するキーワードであるが、毎年あるいは数年で変化するので資料が残りにくい。そのため研究が甚だ遅れている。本稿では、資料が豊富な岡山東照宮祭礼をとりあげて、祭礼練物の意味について考えてみたい。

岡山東照宮の祭礼は江戸幕府の崩壊と明治政府の神仏分離政策によって途絶えてしまった。その原因はこの祭礼が「権力の祭」であり、岡山町人に根づいていなかったからであろうか。

最近、近世都市史研究において、祭礼行列を分析する成果が出されている。武威を可視的に誇示し、表現する政治文化という見解も出されている。特に藩主が徳川政権の許しを得て勧請した東照宮祭礼は政治・イデオロギー性をもつとされる。

『東照宮祭礼賦物図巻』は岡山の東照宮祭礼における町方練物を描いた絵巻資料である。元文四年（一七三九）から四年間行われた、城下町六二町の惣町参加による祭

礼練物「庭訓売物」を描いた絵巻である。「庭訓売物」は「庭訓往来」に記された諸国商人を主題にした「つくり物風流」の行列である。「庭訓売物」は東照宮祭礼の歴史のなかでも町方住民祭礼参加のピークに位置づけられている。岡山城下町の有力町人たちは藩権力と結びついて領国経済を掌握してきたが、一八世紀末頃になると、在方商業が海（河）港を中心にして、近辺農村地帯をも巻き込んで進展した。在方商業の開方性と城下町商業の閉鎖性が際立ち、城下町商人は経済的には衰退していったのである。

「庭訓売物」の四年間は城下町が経済的に在方の優位にたち得た、最後の煌めきであったのかもしれない。惣町参加を造形的に表現した「庭訓売物」は、城下町住民、なかでも当時の人口の過半数を占めた城下町商人のロア（物語）を造型化したものでなかったか。